

AI時代の学問・時間・物語

おおくぼ たけはる
大久保健晴

(慶應義塾大学法学部教授)

福澤諭吉『学問のすゝめ』の初編が明治五(一八七二)年に公刊されてから、約一五〇年が経った。今の高校生は、福澤の『学問のすゝめ』をどう読み、論評するのだろうか。今回の小泉信三賞の課題を選定する際、審査員の間でふとそんなことが話題になった。

「天は人の上に人を造らず」の一文に集約される平等の精神は、現代にまで通じる普遍的価値を持つ。しかし他方で、学問をしたいと思っても、生まれ育った環境によって教育の機会や質に差が出る。教育格差は、今日、深刻な社会問題である。それ故にこそ、弱き人々の声に耳を傾けることが、より一層、重要性を増している。さらに、約十年前の福島第一原発事故を通じて、私たちは過度な科学への期待が危険であることも学んだ。

福澤は大坂の適塾で学び、学問に没頭する青春時代を過ごした。今の高校生は、AIの活用が加速化する現在、何に没頭し、どのような時間を過ごし、学問にかなる意義を見出しているのか。

こうした審査員の問いに対して、想像を大きく上回る、数多くの優れた応募論文が寄せられた。

なかでも小泉信三賞を受賞した浦上真緒さんの論文は、福澤の著作を縦横無尽に読み解き、そのエッセンスを再構築することによって、令和時代における新しい「実学」のあり方を高らかに宣言した意欲作である。AI化が進む現代社会だからこそ、「疑いの精神」を発揮し、社会に流されない内なる自己に磨きをかけ、価値観の異なる他者と活発に議論する智力を鍛え抜かなければならない、と浦上さんは説く。

次席となった宮台はびるさんの論文は、『星の王子さま』の美しい一節からはじまり、「時間をついやす」ことの本質的な価値を瑞々しい文体で描き出す。近年、世間ではZ世代を中心に、映画や動画を倍速で視聴するなど、「タイパ(タ

イムパフォーマンス)」が重んじられている。しかしそれは結局のところ「データベースの消費」に過ぎない、と宮台さんは言う。この世界の複雑さに向き合い、他者である友人の思いに寄り添いながら時間をともにする。そうして生まれる記憶のてざわりこそが、高校時代の宝物となり、人生の彩りとなる。

佳作となった三つの論文もまた、力作である。実際に福島を訪れ、持続可能な社会を支える次世代エネルギーの開発に挑む「フクシマ」の今と未来を描いた宮田康生さんの論文には、ルポルタージュのような臨場感がある。

青山直樹さんの論文は、格差社会の実態を鋭く分析し、(まるで福澤のように)「官民共同」を機軸に、若者の貧困問題を克服するための支援対策を提示する。卓越した社会科学のセンスが光る。

対照的に、石を集める少年「空ちゃん」や月のうさぎ「虹色のチョーク」といった寶石のように煌めく挿話をちりばめながら、量的価値の支配に抗する希望の物語の力に光を当てた福井愛朝さんの論文は、哲学的考察として崇高な気品を持つ。

「今」をどう考え、

どう生きるか

小西祥文
にしよしよふみ

(慶應義塾大学経済学部教授)

今は難しい時代になった、とよく言われる。難しいと感じる理由は人々々々違うが、単に先行きが不透明だからでなく、個人の努力だけではいかんともしい難しい難題ばかりで、その難題が去つてくれる気配がないことも大きな理由の一つだろう。

しかし、歴史を公正な目で振り返れば、我々はより平等・公平で格差も少なく、紛争や戦争も少ない社会を実現して来たはずである。民主制と封建制・独裁制、資本主義と共産主義・社会主義、情報・技術が発達した社会とそうでない社会、客観的エビデンスに基づく社会的意思決定と主観的見解に基づく社会的意思決定、経済的な相互関係に基づく国際秩序と武力による抑止力に基づく国際秩序。我々は後者よりも前者を選ぶことで、今の社会を築き上げてきた。

しかし、我々が享受している社会の制

度・仕組み・価値には看過できない「綻び」があり、その「綻び」は複雑に影響し合うことで重大な問題を引き起こしている。エネルギー資源問題、気候変動、貧困と社会格差、戦争と紛争。我々の難題を挙げればキリがない。現在の制度・仕組み・価値を否定しても、問題の解決には繋がらず、むしろ悪化させてしまうだろう。ではどうすれば良いのか？ 残念ながら、未だ誰も（現代の偉人ですら！）正しい解を提示できずにいる。

高校生の皆さんは、そんな「今」という難しい時代をどのように考え、どのように「今（高校時代）」を生きようとしているのか。

小泉信三賞を受賞した浦上真緒さんは、「学問×AI×福澤論吉」という難しい課題テーマに対して、人間にあつてAIにないものは、知力、価値観、人格であるという視点に立ち、これらを合わせ持った者こそが社会的な意思決定を行うべきである、とする福澤の主張へ回帰させることで、AI時代における我々にとつての学問の意義を見出しおてくれている。

次席を受賞した宮台はびるさんは、高

し、限られた時間を大切にすのあまり、時間を使う対象の本質的価値を損なうことで、大切にしたいはずの時間の価値が失われてしまう矛盾をあぶり出す。膨大な情報が溢れる今日の社会においてどのような「豊かな」高校時代を過ごすべきか、多くの人が共感する問いを投げかけている。

福井愛朝さんは、客観的・量的な価値が重視される今日の社会において、主観的・質的な価値を大事にするような社会的デザインを志向しつつ、「物語と声の力」について論じている。青山直樹さんは、「社会の中の格差」の一例として若者の貧困問題を取り上げ、支援制度の不備や関心の低さについて丁寧な議論し、行政と第三セクターの協働関係の重要性を指摘している。宮田康生さんは、「フクシマ」という言葉に内包される様々な問題（エネルギー、原発事故、地域社会の復興、国際社会の中の日本）について、自ら現地足を運びつつ、資料を丁寧に読み込むことで地に足ついた議論を展開している。

「今」を生きている高校生が「今」という難しい時代に真摯に向き合うことでより良い未来が生まれる、そんな希望を感じさせてくれる良文揃いであった。

実学の精神と全体の俯瞰

谷口和弘

(慶應義塾大学商学部教授)

「経済学は、物事を包括的にとらえることができなくなった。今こそ、物事の真理に近づくには、全体の俯瞰が必要ではないだろうか」

こうした問題意識をつねに強調したのは、かつて慶應義塾大学出版会取締役、N T T出版顧問をつとめた島崎勁一氏である。島崎氏は、私の専門分野の比較制度分析にかかわる多数の書籍を企画・編集された日本有数の社会科学系編集者だった。残念ながら、一昨年十二月二十六日に難病のために亡くなられた。

私は「第四八回小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト」審査に携わっている最中、彼の最良の理解者の齋藤博氏、そして彼の後継者の永田透氏とともに、彼が眠る谷中墓地を訪れるという運命的な機会をえた。というのも、彼らとの話のなかで、真理に向けた全体の俯瞰が重要

だ、という彼の信念を再認識するにいたったからである。

全体像を描くには、物事の過度な矮小化に与しない大局的な構想力はもとより、徹底した情報収集と分析にもとづく問題解決を是とする現地現物の精神も必要となる。つまり、「経営の神様」松下幸之助がいうように、われわれは、現場で実物を見るのはもちろん、現場の人に寄り添い衆知を集め、現実と根差した思考と実践を心がけねばならない。

さらにいえば、真理に向けた全体の俯瞰は、「知識見聞の領分を広くして、物事の道理をわきまえ、人たる者の職分を知る」という福澤諭吉の精神を反映しているようにも思われる。われわれは、こうした実学の精神を基盤に物事の真理に近づくことで、人間として独立自尊を実現できるようになるのだらう。

私は同審査にあたり、実学の精神にもとづいた全体の俯瞰により共感を引き出せたかどうか、を評価基準とした。そんな私が一番共感したのが、浦上論文だった。私にとどまらず他の審査員の共感をも引き出し、見事に小泉信三賞の榮譽に浴した作品となった。彼女によると、現

代において、前提を疑い、的確な判断を下し、他者との議論を深められる智力をつうじて人望を集め、人とAIの上に立ってクリエイティブなリーダーが必要なのだという。ただし、そうしたリーダーには、「人との出会いや読書を通して多様なコンテキストについて学び、たゆまぬ「自分自身の変革」に取り組んでいく「芯の強さ」が求められる。

また、次席に選ばれた宮台論文は、貴重な高校時代を、時間の経過のなかで「記憶のてざわり」となる経験を重ねていく時代とみなし、経験によって現在の楽しさに加え、過去と未来の気づきがえられるのだという。さらに、佳作として選ばれたのは、「フクシマ」にかんする宮田論文、「物語の力・声の力」にかんする福井論文、「社会の中の格差」にかんする青山論文だった。

今回、審査をつうじて選出された五作品には、未来を力強く切り拓いていく若き力が集約されている。かつては三田で塾生としてマルクスと福澤の哲学を学んだ島崎氏も、今では天界で、令和の高校生豊かな構想力に驚かされているにちがいない。

戦場の高校生を憂いて

早川 浩
はやかわ ひろし

株式会社早川書房代表取締役
社長・慶應義塾理事・評議員

海外では私たちの想像を絶する悲惨な戦争が続いている。戦場での生活を余儀なくされている高校生はどんな思いでいるのだろうか。一刻も早く戦火が止むことを切に願っている。

さて、今年も昨年に劣らない粒よりの作品がそろった。選考委員のこの上ない喜びである。

まず佳作入選作、青山さんの「若者の貧困への考察―「官民共同」を通しての解決へ―」は、貧困問題の中でも「子供の貧困」に比べて取り上げられることが少ない「若者の貧困」を扱っているが、筆者の主張が引用や要約のなかに埋没している感があり、峻別をつけてほしかった。しかしこの問題に正面から向き合ったことは大いに評価したい。

同じく佳作、福井さんの「希望の物語、

つなぐ声」は、数値やアルゴリズムという「量的な価値」が重要視される現代社会において、言葉や物語、感情などの「質的な価値」の大切さを説く論文。「モモ」「ころ」「カラマゾフの兄弟」など名作の取り上げ方も効果的で、巻末に二つの価値の分類表を付すなど、心配りが行き届いて気持ちの良い作品になっている。

佳作の三作目は宮田さんの「原発事故を踏まえた福島から考える日本のエネルギーの在り方」。筆者は幼い頃に東日本大震災直後の想像を絶する被災地、福島県浪江町を訪ね、論文の執筆のため再訪し、さらに市民が避難させられた南相馬市まで足を延ばしたという。ウェブサイトで取れる統計や引用が多かったことが少し残念だが、現場をまず訪ねる、その心意気を褒めたい。

次席となった宮台さんの「時」を捉え、「時」を紡ぐ」は、「人生の中で高校時代はどうあるべきか」という問いに対して、マイケル・サンデルの『それをお金で買えますか』を引用しながら、「タイムパフォーマンス」にこだわらない時の流れ

の中で豊かな経験を積むことが大切であると説く。無駄な時間を排除するという「タイム行動」が行き過ぎれば、時間の中に生きている人間の存在自体が無駄になりかねないとの指摘は意外性があり引き込まれた。

さて、小泉信三賞を受賞した浦上さんの「表層的クリエイティブ」からの脱却―『令和時代の実学』を問う―」は、現代を黒船が到来した幕末になぞらえて、福澤諭吉の精神に基づいてAI社会を生き抜くための叡智を考察する。人間とAIの違いを「コンテクストを持つ可否か」と定義し展開している。論旨に一貫性があり、具体例を引きながら自身の見解を明瞭に表わす力量は最優秀賞に値する。ひとつだけ言い添えれば、「リバティ」や「スピーチ」など西洋の新しい概念を「自由」、「演説」と訳した福澤を見習って、できれば「コンテクスト」に相応しい日本語を考えて欲しかった。

来たる年も私たち審査員が選考に頭を悩ませるような力作が読めることを期待したい。